

泣かない景行天皇

——『古事記』の天皇像とヤマトタケル譚——

島 田 伸 一 郎

—

景行記はそのほとんどがヤマトタケルの物語を語ることに費やされている。そのありようは『日本書紀』が景行天皇の業績を多く語っているのと対照的である。『古事記』は王権の版図拡大をヤマトタケル伝承に収斂しデフォルメして描いた。その結果として、父である景行天皇に疎まれ、西に東にと征討に赴かされるタケルの姿が悲劇性をもつて描かれ、歌謡によってその終焉が感動的に語られることで、『古事記』の中でも最も文芸的な部分となっている。これは官僚的にして従順に父天皇の命に従う『書紀』のタケルの姿と全くの対極をなすありかたである。また終焉における際の歌謡群も、『書紀』では景行天皇の作となっていて、ほとんど『古事記』とは別の趣である。少なくとも作品として成立した後の段階で、『書紀』と較べて『古事記』の方がより高い文学性をもつものと見ることに異論はあるまい。そこに『古事記』の有する大きな魅力があるといえるだろう。その魅力ゆえに、タケル物語のもつ文学性につい

ては数多く論じられてきたが、しかし一方で、どのような意図のもとに編纂されたものであるのかという『古事記』の本質を考えた時、編纂の企画当初から高い文学性を主題とし、要求したとは考えられない。これまでのタケル論では、父景行天皇との対立的な関係性に注目して、西郷信綱氏が、

ところで、オホタラシヒコ（景行）と小碓（ヤマトタケル）とは父と子の関係である。そして小碓はその父にとつて、いわば怖べき子供であつた。^{アソフ・デリブル}……

……父と子のかかる緊張関係は、民間レベルでも相続問題にからんで何らかの形で経験されたはずだが、王座という特別なものの争われる王族の間では、当然のことながらこの緊張は一そう劇化せざるをえない。記紀に記された、神武天皇の庶兄タギシミミの謀反から壬申の乱に至る、王継承をめぐる数多い内乱の過程を見るならば、そこにまさしく『王権の劇』と呼ぶべきものが演じられていた消息を知りうるだろう。ヤマトタケルの物語も、古代の王権に固有なこの構造のなかで読まらるべきだと私は考える。少なくとも、古事記のヤマトタケル物語の文学性をささえるテコになっているのが、景行と小碓とのかかる劇的対立関係であることは確かで、その点、日本書紀のヤマトタケルには、文学の主人公としての資格に欠けるものがある。

と述べ、⁽²⁾また吉井巖氏が、

『日本書紀』も『古事記』も、ヤマトタケルやヤマトタケル伝承をけつして肯定的につけ入れたのではないのに、我々が『古事記』のヤマトタケルとその物語に親しみと心をひかれるところがあるのは、『古事記』の否定的な受容の仕方のなかにその鍵をとくものがあると考えざるをえない。『古事記』がヤマトタケルを、天皇から疎外される皇子として捉え直した。そこから我々が魅力を感じる多くのものが出てきたのではないか、と言つことが

できる。

……山背大兄皇子、古人大兄皇子、有間皇子、大友皇子、大津皇子、数えてみても実に多くの皇子が、皇位争奪のなかで死んでいる。有間皇子に対する人麻呂や憶良の挽歌が、万葉集に残っているように、人々は皇子の死に悲しみの歌をさげた。おそらくこのような心情の歴史がヤマトタケルの物語を支持したのであろう。

と述べているように、父子の軋轢を主軸とした説話素そのものが、タケル物語を『古事記』という作品に吸引した理由として考えられている。それはいわば「原タケル伝承」の遡源をも含めて、タケル物語の内部に『古事記』への採録の理由を見出すものであったように思われる。さらに吉井氏は

『古事記』は一方で皇室の政治的要請に答えた天皇治政史物語でありながら、他方、この基本的構想に沿いながら、ヤマトタケルを通して、その支配体制下に生きかつ死んだ人々の姿を語ってみよとする意図を秘めもった、まことに不思議な性格の書であったと言わねばなるまい。

と述べているが、その「不思議な性格」ゆえに魅了される点は了解の上で、ここでは景行記のあり方を採り上げながら、タケル譚を文学性豊かな形で『古事記』が採用した理由、結果的に文学的たり得た契機を『古事記』の構想そのものに求めてみたい。

二

景行記は、冒頭の天皇系譜に続けて、大碓命に関する次のような話を語っている。⁽⁵⁾

是に、天皇、三野国造が祖、大根王の女、名は兄比売・弟比売の二の嬢子、其の容姿麗美しと聞き看し定めて、其の御子大碓命を遣して、喚し上げき。故、其の遣さえし大碓命、召し上ぐること勿くして、即ち、己自ら其の二の嬢子に婚ひて、更に他し女人を求めて、詐りて其の嬢女と名けて、貢上りき。是に、天皇、其の他し女なることを知りて、恒に長き暇を経しめ、亦、婚ふこと勿くして、惣ましき。

『日本書紀』もこれと同じ話を伝えている。⁽⁶⁾

是の月に、天皇、美濃国造、名は神骨が女、兄が名は兄遠子、弟が名は弟遠子、並に有国色かほよしと聞きしめて、則ち大碓命を遣して、其の婦女の容姿を察しめたまふ。時に大碓命、便ち密にたは通かへりてけて復命たまをさず。是に由りて大碓命を恨みたまふ。

記紀ともに、天皇が召し上げようとした美濃の国の姉妹を、使者として派遣された大碓が我がものにした点（二重傍線部分）は共通であり、いずれの記事も、後の部分に美濃に於ける大碓命の子孫を語っている。記紀の記述で異なる点は、美人姉妹とその親についての素性を別にすれば、不実な行動に走った大碓が、『古事記』では替え玉の娘を仕立てたのに対し、『書紀』では横取りしたままでしらぬ顔を決めている点である。また、そうした大碓に対し、『書紀』では天皇が大碓に対して恨みを抱いているが、『古事記』の景行は直接的な責めも恨みも見せず、替え玉の娘に辛く当たるといふ態度を示す。⁽⁷⁾ この文脈は不自然である。これについて西条勉氏は、『古事記』がテクストの仕組みにおいて

「前代の大王像の解体と再編」を描く中で、

その不自然な文脈は、背任への憎悪を語らないことで景行のオホウスを処罰する動機を消し去り、それによってユウスの暴挙をいつそう際立たせるための伏線だったのである。

と述べている。⁽⁸⁾『古事記』の場合は、すぐあとに大碓が小碓命によって惨殺されるという筋書きが用意されていて、「ヤマトタケル（小碓）命西征・東征譚の一部として機能させられている」と見る事が出来るため、物語の展開上はここであえて景行天皇が大碓を責めなくても辛うじて文脈のつながりを得ているといえよう。またさらに大碓が「朝夕の大御食」に出て来ないのを「ねぎし教へ覺せ」と小碓に命じる景行の態度に、都倉義孝氏のように「儒教的天子像」を認めることも可能かも知れない。⁽¹⁰⁾しかしながら同じ都倉氏が、

地方豪族の祖霊・国魂に斎く妹・娘などが天皇に奉獻されるのは、その女達に着けて豪族がおのれらの祖霊・国魂を天皇に献じ、服属を誓うためである。……天皇に奉獻されるべき女を寝取ったオホウスの行為は、天皇の一身に集中させ付着すべき国魂を横領したことであり、彼の意志の有無にかかわらず、王権篡奪の指向を意味する⁽¹¹⁾と述べているように、やはり軽視されるべきことがらではない。⁽¹¹⁾都倉氏も指摘しているが、仁徳記の語る、

亦、天皇、其の弟速総別王を以て媒と為て、庶妹女鳥王を乞ひき。爾くして、女鳥王、速総別王に語りて曰はく、「大后の強きに因りて、八田若郎女を治め賜はず。故、仕へ奉らじと思ふ。吾は、汝命の妻と為らむ」といひて、即ち相婚ひき。是を以て、速総別王、復奏さす。

という事件は、反逆者としての速総別王と女鳥王の死をもって終わる。また、これとは反対に、天皇の召し上げる女性、日向の髪長比売の美しさに心奪われた大雀、すなわち即位前の仁徳は、建内宿禰に頼んで天皇の許しを得るという段取りで髪長比売を手に入れている。⁽¹²⁾ それに対して当該の大碓は、そうした段取りを踏むことはおろか、自分が兄比売・弟比売を召し上げる使者として派遣されたにもかかわらず、勝手に替え玉を仕立てて女性を横取りしている。大碓は天皇の使者として「遣」わされているのであり、そのように派遣された使者は「復命(奏)」するのが通例である。『書紀』は大碓が「復命」しなかったと記している。「復命(奏)」の重要さについては『古事記』でも同じであり、田中智樹氏が記中の全用例を挙げて詳論している。⁽¹³⁾ この「復命」は、天皇が女性を召し上げる際に限らず、臣下の某が天皇の命によって某所に派遣された場合、すなわち「ツカハ」された時には、ほとんどの場合に必要な結果として要求される。「復命(奏)」のあり方も含め、『古事記』で使者が「ツカハ」されている場面について見ることにしたい。⁽¹⁴⁾ なお、各用例下の「」内には派遣を命じた主体者を示した。

(1) 即遣予母都志許売……令追。……逃行。猶追。
(上巻・黄泉の国〔伊耶那美〕)

(2) 乃遣型貝比売与蛤貝比売、令作活。……成麗丈夫……而、出遊行。
(上巻・根の堅州国訪問〔神産巢日〕)

(3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) 爾、高御産巢日神・天照大御神之命以、……思金神令思而、詔、……是、

使何神而将言趣。爾、思金神及八百万神、議白之、天菩比神、是可遣。故、遣天菩比神者、乃媚附大国主神、至于三年不復奏。是以、高御産巢日神・天照大御神、亦、問諸神等、所遣葦原中国之天菩比神、久不復奏。亦、使何神之吉。爾、思金神答曰、可遣天津国玉神之子、天若日子。故爾、以天之麻迦古弓……賜天若日子而、遣。

於是 天若日子、……至于八年不復奏。

(上卷・葦原中国的平定〔高御產巢日・天照〕)

(10) (11) (12) 天若日子、久不復奏。又遣曷神以問天若日子之淹留所由。……答曰、可遣雉、名鳴女時、詔之、汝行、問天若日子狀者、汝所以使葦原中国者、言趣和其国之荒振神等之者也。何至于八年不復奏。

(上卷・天若日子の派遣〔天照・高御產巢日〕)

(13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) 於是、天照大御神詔之、亦遣曷神者、吉爾、思金神及諸神白之、……名伊都之尾羽張神、是可遣。……若亦、非此神者、其神之子、建御雷之男神、此応遣。……故、別遣天迦久神可問。故爾、使天迦久神問天尾羽張神之時、答曰、恐之。仕奉。然、於此道者、僕子、建御雷神可遣、乃貢進。爾、天鳥船神副建御雷神而遣。

(上卷・建御雷神の派遣〔天照〕)

(20) 是以、此一神……問其大國主神言、天照大御神・高木神之命以、問使之。(上卷・建御雷神の派遣〔天照・高木〕)
(21) 故爾、遣天鳥船神、徵來八重事代主神而、問賜之時、……故、建御雷神、返參上、復奏言向和平葦原中国之狀。

(上卷・建御雷神の派遣、大國主神の國讓り〔天照・高木〕)

(22) 於是、亦、高木大神之命以、覺白之、天神御子、自此於興方莫便入幸。荒神、甚多。今、自天遣八咫鳥、故、其八咫鳥、引道、從其立後、心幸行。故、隨其教覺、從其八咫鳥之後、幸行者、……

(中卷・神武・八咫鳥の先導〔高木〕)

(23) 故、先遣八咫鳥、問二人曰、今、天神御子、幸行。汝等、仕奉乎。

(中卷・神武・兄宇迦斯と弟宇迦斯〔伊波礼毘古〕)

(24) (25) (26) (27) 又、此之御世、大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而、令和平其麻都

漏波奴……人等。又、日子坐王者、遣旦波国、令殺玖賀耳之御筭。……即副丸邇臣之祖、日子国夫玖命而遣時、如此平訖、參上覆奏。

(中卷・崇神・建波邇安王之叛逆〔天皇〕)

(28) (29) 爾、自東方所遣建沿河別与其父大毘古、共往遇于相津。故、其地、謂相津也。是以、各和平所遣之国政而、覆奏。

(中卷・崇神・初国を知らず天皇〔天皇〕)

(30) (31) (32) (33) 爾、遣山辺之大鶴、……令取其鳥、故、是人、……取其鳥而、持上獻。……故、其御子、令拜其大神宮將遣之時、令副誰人者、吉。……即曙立王・菟上王・玉、副其御子遣時、……爾、所遣御伴王等、聞歡見喜而、御子者坐檳榔之長穗宮而、貢上馭使。

(中卷・垂仁・本牟智和氣の御子〔天皇〕)

(34) 又、天皇、以三宅連等之祖、名多遲摩毛理、遣常世国、令求登岐士玖能迦玖能木実。……故、多遲摩毛理、遂到其国、採其木実以、縵八縵・矛八矛将来之間、天皇、既崩。

(中卷・垂仁・多遲摩毛理〔天皇〕)

(35) (36) 於是、天皇、……名兄比売・弟比売二孃子、其容姿麗美而、遣其御子大碓命以、喚上。故、其所遣大碓命、勿召上而、即、己自婚其二孃子、更求他女人、詐名其孃女而、貢上。

(中卷・景行・大碓命〔天皇〕)

(37) (38) 於是、天皇、……詔之、西方有熊曾建二人、是不伏無礼人等。故、取其人等而、遣。……爾、詔、吾者、……名、倭男具那王者也。意礼熊曾建二人、不伏無礼聞看而、取殺意礼詔而、遣。……故、如此撥治、參上、覆奏。

(中卷・景行・倭建命の熊曾征伐、倭建命の出雲征討〔天皇〕)

(39) (40) (41) (42) 爾、天皇、亦、頻詔倭建命、言向和平東方十二道之荒夫琉神及摩都樓波奴人等而、副吉備臣等之祖、名御組友耳建日子而遣之時、……即曰其姨倭比売命者、天皇既所以思吾死乎、何、擊遣西方之惡人等而、……今更平遣東方十二道之惡人等、……悉言向和平山河荒神及不伏人等、……爾、其后、名弟橘比売命、

白之、妾、易御子而、入海中。御子者、所遣之政遂、応覆奏。(中巻・景行・倭建命の東征、弟橘比売命〔天皇〕)

(43) 爾、大雀命、聞其兄備兵、即遣使者、令告宇遲能和紀郎子。故、聞驚以、兵伏河辺。

(中巻・応神・大山守命の反乱〔大雀〕)

(44) 故、太后、聞是之御歌、大忿、遣人於大浦、追下而、自步追去。

(下巻・仁徳・吉備の黒日売と皇后の嫉妬〔磐姫皇后〕)

(45) (46) 天皇、聞看其太后自山代上幸而、使舍人、名謂鳥山人、送御歌曰、……又統遣丸邇臣口子而、歌曰、……

故、是口子臣、白此御歌之時、大雨。(下巻・仁徳・山城の筒木宮〔天皇〕)

(47) 天皇、為伊呂弟大長谷王子而、坂本臣等之祖、根臣、遣大日下王之許、令詔者、汝命之妹、若日下王、欲婚大

長谷王子。(下巻・安康・大日下王之殺害〔天皇〕)

(48) 爾、天皇詔者、奴乎、己家似天皇之御舍而造、即遣人、令燒其家之時、其大鼎主、懼畏、稽首曰、奴有者、隨奴不覺而、過作、甚畏。故、獻能美之御幣物、……令取犬繩以獻上。故、令止其、著火。

(下巻・雄略・若日下部王〔天皇〕)

(49) (50) 故、欲毀其大長谷天皇之御陵而、遣人之時、其伊呂兄意祁命奏言、破壞是御陵、不可遣他人。……爾、天皇詔、然、隨命宜幸行。是以、意祁命、自下幸而、少掘其御陵之傍、還上、復奏言、既掘壞也。

(下巻・顯宗・御陵の土〔天皇〕)

(51) 故、遣物部荒甲之大連・大伴之金村連二人而、殺石井也。(下巻・繼體・此の御世〔天皇〕)

これらの例を見ると、「ツカハ」している主体はイザナミ、カムムスヒ、アマテラス、タカミムスヒ、イハレビコ、オホサザキ、および各天皇である。つまり「ツカハス」は、『古事記』では天皇とその系譜につながるもの、いわば天皇に準じた立場の人または神についてののみ使われていることが確認出来る。⁽¹⁵⁾ 天皇専用語とは言い切れないが、大和朝廷の王権そのものを代表する神や人へのみ用いられているとみてよからう。そしてこの「ツカハス」という行為には、波線部にあるように当然ながら期待される結果がついてくるのが通例である。右に挙げた例を見てみると、1ではヨモツシコメたちはイザナキを追跡し、2ではキサカヒヒメ・ウムカヒヒメがオホナムチを蘇生させている。3から21までの、国譲りに関する話の中では、失敗を重ねた末にようやくこの国がアマツカミの御子に委譲されるという展開であって、「カヘリコトマヲサズ」ということを繰り返し確認しつつ、最後にタケミカツチの「カヘリコトマヲシキ」で、使者としての任務が完了となっている。22・23でもヤタガラスは与えられた使命を果たし、24から29の崇神朝の皇子將軍の派遣でも、「覆奏」が果たされる。30から33では、ホムツツケが言葉を発したことを、供として派遣されていたアケタツ・ウナカミの両皇子が喜び、天皇の許に駅使を送っている。34では、忠臣タチマモリが常世の国にまで到り、天皇の所望するトキジクノカクノコノミを獲得して将来したもの、命じた天皇が既に崩御している。タチマモリ自体は忠実に使命を果たしたといえる。当該の景行記において、43では使者はウチノワイラツコに急を告げ、44でも、使者が吉備のクロヒメを船から降ろして追いつて立っている。45・46では、トリヤマとクチコノオミは天皇の歌をイハノヒメに伝えている。とくにこのクチコノオミは、わざと戸口に出てこない皇后を待ち、大雨の中で庭に伏していたために、腰まで水に浸かってしまふ。妹でイハノヒメに仕えるクチヒメが歌によって兄の努力を訴えているが、ツカハされた使者とはこのようなものであるのが本来であろう。47ではネノオミは安康天皇の言葉をオホクサ

カノオホキミに伝える。48の雄略の使者は、シキノオホアガタヌシの家を命令通りに焼き払おうとするが、県主の謝罪によって許される結果となっている。49・50では、父の仇と雄略を恨む顕宗天皇の命をオケノミコトが受け、御陵のほんの一部を掘ることで還り上り、「カヘリコトマヲシ」ている。51は筑紫国造イハヅを殺すことで使命が果たされている。こうしてみた時に、「ツカハ」された使者は、使命を果たすのが当然であり、多くの場合はそこに「カヘリコトマヲス」ことを伴う。言葉で命じられた任務を遂行し終えたとき、言葉をもって報告して終わるのが当然である。とくに『古事記』の場合には、天皇またはそれに準じたものだけが誰かを「ツカハス」のであり、復命しないのは著しい不忠といえる。景行記の場合、ヤマトタケルは東征の途中で「悉く山河の荒ぶる神と伏はぬ人等とを言向け和し平げ」ているが、最後には大和に帰らずに死を迎える。谷口雅博氏は、

倭建命がヤマトに帰れない所以は、ヤマトに入ることは即ち天皇として即位することであるという、『古事記』の持つヤマト観に由来していると考えられる。

と述べているが、死してもなおヤマトに還ることが出来ずに白千鳥となって飛翔していくタケルは、ついに東征の復命をしないままに終わる。期せずして不忠な最後を迎えねばならなかったことも、タケルの負う悲劇性の一面と言つべきである。あくまで天皇に忠実な『書紀』のタケルは、死の淵にあつてなお、

因りて吉備武彦を遣して、天皇に奏して曰したまはく、「臣、命を天朝に受りて、遠く東夷を征つ。……冀はくは、蜀の日曷の時に、天朝に復命さむと。……」

と復命の意志を使者に伝えさせている。守屋俊彦氏は、

能煩野で亡くなることになったために、吉備武彦をして復命せしめたのであって、もし大和へ無事に帰ったのであれば、そこで彼自身が復命したとみるべきであろう。

と、より原話に近い形を「復命」する話に見ているが、⁽¹⁷⁾「ツカハス」ことについては、やはり復命があるべきものであろう。

以上を考えた時、大碓の取った行動（前掲用例の破線部分）は『古事記』の中の皇子の行動として極めて異例であり不忠と言わざるを得ない。また、これに対する景行天皇の態度も、不忠を責めず、使者として「ツカハ」した責務も問わず、全く理解しがたいほどである。『書紀』の場合も似通ったものになっており、わずかに「是に由りて大碓命を恨みたまふ。」と記すのみで、天皇の態度としては不自然である。だが『古事記』は、その「恨む」ことさえさせない。景行天皇には大碓に対する何らの感情も持たせようとしない。そしてこれは特に景行に限ったことではない。荻原千鶴氏は、『古事記』の中の天皇や皇位継承の有資格者たちが、怒りを表出しないことを指摘し、ただ一例、ヒトコトヌシノカミに対して「怒」りを表す雄略天皇だけが「怒れる」天皇であるという特殊性を有すると述べている。⁽¹⁸⁾氏の論によれば、『古事記』では天皇達に「怒る」ことが許容されていないが、雄略はその武力性をもって皇位についた僭上性ゆえに、またその「怒り」によって神と対峙し得るために、「怒る」天皇として造形されたのである。そうした点で積極的な理由を見出し得る、いわば『古事記』の天皇像としての異例ということになる。その唯一の怒れる天皇である雄略も、

又、天皇、長谷の百枝槻の下に坐して、豊楽を為し時に、伊勢国の三重の嫫、大御蓋を指し挙げて献りき。

爾くして、其の百枝槻の葉、落ちて大御蓋に浮きき。其の嫫、落葉の蓋に浮けることを知らずして、猶大御酒を献りき。天皇、其の、蓋に浮ける葉を看行して、其の嫫を打ち伏せ、刀を以て其の頸に刺し充て、斬らむとせし時に、其の嫫女、天皇に白して曰はく、「吾が身を殺すこと莫れ。白すべき事有り」といひて、即ち歌ひて曰はく、

……

という話の中では、非礼に対して即座に采女を斬り殺そうとしているものの、そこには「怒る」という言葉はなく、歌によってその「怒り」はすっかり絡め取られてしまっている。神との対峙という特別な理由以外では、雄略さえも「怒り」を抑えられた感がある。まして景行天皇の「怒り」など、『古事記』の中では許容され得る筈がない。召し上げる筈の女性を勝手に横取りし、天皇の命によって「ツカハ」されたにもかかわらず「復命」もしない不忠な皇子大碓に対する「怒り」もなく、「恨む」こともない。それは、一つにはもちろんこの後の小碓命による惨殺を持ち出すためであり、それは天皇が小碓を畏れ、遠ざける理由付けとして必要な展開である。ここで大碓を責めたり、さらに処罰してしまつては、兄を「ねぎさす」という小碓の行為に繋がりにくい。しかし、そうした小碓の凶暴性を示すためならば、説話展開によって他にいくらかでも達成できたと思われる。景行天皇がかくも感情表出のない、存在感の乏しい天皇として描かれているのには、別に理由があると思われる。都倉氏は、

……景行は、タケルの悲劇をより悲劇的たらしめるといふ文芸的效果をねらつて無味乾燥、冷酷非情な命令者として造形されたのではなく、日常次元（ケ）における王権の顕現たる秩序性（正）の象徴として形象化された

存在である。

と述べる。王権の顯現としての秩序性を表す意味があるとしても、それは王権からはみ出したタケルの負としてのあり方と一対として捉えられるのであり、大碓の所業に対する態度としてはやはり不自然さが残る。

三

景行記の記述を『書紀』のそれと並べてみた時、先の大碓の不忠な振舞いを除くと、共通しているのは必然的にヤマトタケル熊曾征討と東征物語だけである。そこで語られている景行天皇像について見てみる。

タケルを熊曾征討に送り出す場面は、『古事記』に

是に、天皇、其の御子の建く荒き情を惶りて詔はく、「西の方に熊曾建一人有り。是、伏さず礼無き人等ぞ。故、其の人等を取れ」とのりたまひて、遣しき。

とあり、『書紀』には、

冬十月の丁酉の朔にして己酉に、日本武尊を遣して、熊襲を撃たしめたまふ。

とあって、景行の言葉はない。熊曾征討から戻ったタケルに対する言葉は記紀のいずれにもなく、ただ『書紀』に「天皇、是に日本武の功を美めたまひて、異に愛みたまふ。」と記すのみである。

また、東征物語の始めと終わりの部分は、記紀それぞれ次のようになっている。

景行記

爾くして、天皇、亦、頻りに倭建命に詔はく、「東の方の十二の道の荒ぶる神とまつろはぬ人等とを言向け和し平げよ」とのりたまひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣りしし時に、ひひら木の八尋矛を給ひき。

……（中略）……

景行紀

秋七月の癸未の朔にして戊戌に、天皇、群卿に詔して曰はく、「今し東国安からずして、暴神多に起る。亦蝦夷悉に叛き、屢人民を略む。誰人を遣してか其の乱れたるを平げしめむ」とのたまふ。群臣皆誰を遣さむといふことを知らず。日本武尊の奏して言したまはく、「臣は則ち先に西を征つことに勞き。是の役は必ず大碓皇子の事ならむ」とまをしたまふ。時に大碓皇子、愕然きて、草の中に逃げ隠る。則ち使者を遣して召し来さしめたまふ。爰に天皇責めて曰はく、「汝が欲せざらむを、豈強に遣さむや。何ぞ未だ賊に対はずして、予め懼るること甚しき」とのたまふ。此に因りて、遂に美濃に封さしたまふ。仍りて封地に如る。是身毛津君・守君、凡て二族が始祖なり。是に日本武尊、雄誥して曰したまはく、「熊襲既に平けて、未だ幾の年も経ざるに、今し更東夷叛けり。何の日にか大平ぐるに遠らむ。臣勞しと雖も、頓に其の乱を平げむ」とまをしたまふ。則ち天皇斧鉞を持ちて、日本武尊に授けて曰はく、「朕が聞けらく、其の東夷は、……未

歌ひ竟りて、即ち崩りましき。爾くして、駅使を貢上り
 き。是に、倭に坐しし后等と御子等と、諸下り到りて、御
 陵を作りて、即ち其地のなづき田を匍匐ひ廻りて哭き、歌
 為て曰はく、（下略）

だ王化に染はず。……亦是の天下は則ち汝の天下なり。是の
 位は則ち汝の位なり。願はくは、深く謀り遠く慮ひ、姦しき
 を探り変くを伺ひ、示すに威を以ちてし、懐くるに徳を以ち
 てして、兵甲を煩さずして、自づからに臣順はしめよ。即ち
 言を巧みて暴神を調へ、武を振ひて姦鬼を攘へ」とのたまふ。
 是に日本武尊、乃ち斧鉞を受けりて、再拜みて奏して曰さく、
 「嘗て西を征ちし年に、皇靈の威を頼りて、三尺剣を提げて
 熊襲国を撃ち、未だ決辰を経なくに、賊首罪に伏ひぬ。今し
 亦神祇の靈を頼り、天皇の威を借りて、往きて其の境に臨み、
 示すに徳教を以ちてせむに、猶し服はざる有らば、兵を挙げ
 て撃たむ」とまをしたまふ。仍りて重ねて再拜みたまふ。天
 皇、則ち吉備武彦と大伴武日連とに命せて、日本武尊に従は
 しめ、亦七掬脛を以ちて膳夫としたまふ。

……（中略）……

既にして能褒野に崩ります。時に年三十なり。

天皇聞しめして、寢席安からず、食味甘からず、昼夜に喉
 咽ひて、泣悲しび擗ぢたまふ。因りて大きに歎きて曰はく、
 「我が子小碓王、昔熊襲の叛きし日に、未だ総角にも及らぬ
 に、久しく征伐に煩み、既にして恒に左右に在りて、朕が不
 及を補ひき。然るに東夷騒動み、討たしむる者勿し。愛しき
 を忍びて賊の境に入らしむ。一日の顧はずといふこと無し。
 是を以ちて、朝夕に進退ひて、還らむ日を佇待ちしに、何の
 禍ぞも、何の罪ぞも、不意之間、我が子を倏亡すること。

— 今より以後、誰人と与にか鴻業を經綸めむ」とのたまふ。

総じていえば、『書紀』の景行の方が饒舌である。『書紀』は全体的に漢文的修辭で満たされており、会話文もそれに漏れないのはいうまでもないが、タケルと天皇との間には多少なりとも会話の行われている感がある。それに対して景行記では、天皇は東征に向かうタケルに対して殆ど事務的な挨拶に徹している。『書紀』は、東征に派遣されるのを懼れて逃げ隠れる大碓の姿を語り、対照的に自らの疲労にも拘らず天皇の期待に応えようとするタケルの姿を強調する。そして「是の天下は則ち汝の天下なり。是の位は則ち汝の位なり。」とまで言う天皇に対し、タケルも力強く答えている。記紀のタケル像の差異が顕著な部分といえよう。そして特に記紀で大きく異なっているのはタケル終焉の場面である。傍線部にあるように、『書紀』は、タケルの死の報に接して景行天皇が「胸を打って泣き悲し」んだとしてその悲嘆の言葉を載せる。これは出発に際しての天皇の期待感と呼応するものとなっている。一方の『古事記』では、死の知らせを受けた后や御子たちが大和から下り来て、這いずり回って泣き、歌を歌ったとするが、父であり東征の指令者である景行天皇の姿も言葉も語られていない。もちろん『書紀』の文面からは漢文的な粉飾という要素を割り引いて読む必要はあるが、皇子の死を聞いた父天皇がその死を悲しんで泣くということ自体は、自然な情愛の発露と言つてよいだろう。『古事記』では、西征に赴かせる発端を、暴虐な行いのタケルに対する景行の「オソレ」として語っているため、タケルの死の報せを受けても、今更泣くわけにもいかない道理ではある。しかし、この「泣かない」ということもまた、『古事記』の他の天皇に共通する傾向である。記中に「ナク」という語は三十四例あり、⁽²⁰⁾ 場面で十六を数える。泣いているのは、上巻でイザナキ、スサノヲ、アシナツチとテナツチ、イナバノシロウサギ、

オホナムチの母のサシクニワカヒメ、スセリビメ、アメワカヒコの父や妻子、それにホヨリ、中巻では、サホビメ、ヤマトタケル、タケルの妻子、応神記の海人、秋山之下氷壯夫、下巻で軽の乙女（軽太子の歌中）、引田部の赤猪子、清寧記の小楯連である。この中には天皇も、後の皇位継承者もない。

一方、『書紀』の中で泣いている者のうち、天皇について挙げると、先の景行のほかに、

・太子ウチノワキイラツコと皇位を譲り合つうちに自殺した太子を悲しみ、胸を打って泣き悲しむオホサザキ

（仁徳即位前紀。応神記にこの話なし）

・身を隠していた弘計（顕宗）と億計（仁賢）が身分を明かそうと決意して抱き合つて泣く。（顕宗即位前紀）

・亡父の遺骨を探し出せずに兄である皇太子億計とともに激しく泣く顕宗天皇（顕宗紀元年）

・皇孫建王が八歳で薨じたのを悲しんで慟哭する斉明（斉明紀四年）

・十市皇女の死に発哀の礼を行う天武（天武紀七年）

・舍人王の卒去にあたり、哭礼を行う天武（天武紀九年）

の例を見る。天武の哭礼が多分に儀礼に則つたものであるとしても、泣くことはいわば感情の直接的な発現であり、情の自然である。『古事記』のヤマトタケル物語が叙情性に富むのも、一つには自らの悲劇性を伯母である倭姫に泣いて訴えているためである。タケルに限らず、そのタケルの死を聞いて駆けつけた后や御子も泣く。愛妻を喪ったイザナキは妻の枕べを這い回って泣き、スサノヲは大人になるまで「泣きいさち」、全身の毛皮を剥がれたイナバノシロウ

サギは泣き、息子を殺されたオホナムチの母神は泣き、アメワカヒコを喪った妻や親たちも泣き、兄の釣り針を無くしたホヲリも泣き、兄と夫への情愛の狭間にあつてサホビメも泣く。それにも拘らず、『古事記』の天皇達は全く泣かないのである。山田永氏は「泣くのは自らの欠如を補うためであつた。」という。⁽²¹⁾『古事記』の天皇は、自らに欠如を持たない完璧なる存在として造形されているといえるだろうか。いや、泣くことばかりではない。喜怒哀楽の全てにおいて、『古事記』の天皇達はひどく無感動なように思われる。「怒り」については先にふれたが、試みに『古事記』の中に「ヨロコブ」という語を探してみると、

- (1) 此時、伊耶那伎命、大歡喜詔、……(上巻・三貴子の分治)
- (2) 爾、天宇受売白言、益汝命而貴神坐故、歡喜咲樂、……(上巻・天の石屋)
- (3) 故、乞遣其父大山津見神之時、大歡喜而、……(上巻・邇々芸命の結婚)
- (4) 於是、天皇、大歡以詔之、天下平、人民榮、……(中巻・崇神・神々の祭祀)
- (5) 爾、所遣御伴王等、聞歡見喜而、御子者坐檳榔之長穗宮而、貢上馭使。(中巻・垂仁・本牟智和氣の御子)
- (6) ……乃於其隼人賜大臣位、百官令拜。隼人、歡喜、以為遂志。(下巻・履中・水齒別命と曾婆訶理)
- (7) 於是、其姨飯豐王、聞歡而、令上於宮。(下巻・清寧・二王子の舞)

とあり、この中で天皇の例が一例である。また、「ワラフ」は、

(1) 爾、高天原動而、八百万神共咲。(上巻・天の石屋)

(2) 於是、天照大御神、以為怪、細開天石屋戸而、内告者……何亦八百万神諸咲。(上巻・天の石屋)

(3) (大前小前宿禰) 如此歌、參歸、白之、……若及兵者、必人、咲。僕、捕以貢進。(下巻・允恭・輕太子と輕太郎女)

(4) 如此相讓之時、其会人等、咲其相讓之狀。(下巻・清寧・二王子の舞)

とあるが、天皇の「ワラフ」例はない。いずれも絶対数の少ない例であるが、これを『書紀』に求めてみると、「ヨロコフ」は八十九例を数え、そのうちに天皇の場合が十九例ある。⁽²²⁾ また「ワラフ」は、十七例を見出せるが、その中に、小子部のスガルを「ワラフ」雄略と、木に登らせた人を射落として「ワラフ」武烈の例を見る。⁽²³⁾ この武烈の例などは、純粹な心の楽しみを表す「笑い」と言いかねるが、「ワラフ」という語そのものの表す感情自体が、実は単純ではない。柳田國男が、

ヲコの根底には、最も広い意味の人間の不覺といふものが、横たはつて居ることは事実であらう。普通の至つて有りふれた生活知識、誰でも備へて居るやうな平凡な技術を備へず、又は判断や予知力を欠いた結果、屢々なみの人のせぬ事をして居るのもヲコの一つであり、それを発見した人々は、せめて我身のそれよりも立ち優つて居たことを知つて、いはゆる楽しい驚きを高く表示したのだらうが、そんな機会は実は追々に乏しく、又いつまでも絶えないやうでも困るのであつた。そこで第二に現はれて来ようとするのは、強ひてさういふ笑ふべきものを搜しまはつて、何とかしてヲコの笑ひの楽しみを持續しようとすることで、其為には聴けば憤るやうな人も笑

はれ、もしくは少数のすね者の、寧ろ尋常を笑はんとする者が雷同附和せられる。

と述べているように、⁽²⁴⁾「笑い」には知的判断を経由する側面があって、「泣く」ことほどに直接的な感情の表出とは言えない。それでも『書紀』が、僅かに二例ながらも「ワラフ」天皇の姿を伝えていることには注目すべきだが、とにかく『古事記』の天皇は「ワラフ」こともない。もとより記紀のような書の内容について、後代に出現する一般的な文学作品と同レベルの人物造形や感情表出を見出そうとするのには無理があろう。しかし、神話や説話を採用しつつ叙事を展開し、そこに主題と構想を有する作品としての姿を持つものである以上、その中の人物像に意図された造形があるのも当然である。そのように見た時に、『古事記』の収載する説話部分に彩りを与えているのは、殆どが天皇以外の人物であると言わねばならない。

前述の三重の采女を殺そうとした雄略にしても、いきなり殺そうとしてはいるが、その感情を表す言葉はない。采女の命乞いの歌を持ち出すために刀を抜かされたもののようにさえ見える。サホビメをついに取り戻せずに死なせてしまった垂仁も、作戦の失敗を悔いて玉造を憎んでいるが、悲しみの感情は感じられない。仁徳は、既に多くの先々が指摘しているように儒教的な徳を体现する天皇であって、感情を露わにすることはなく、仁徳記を賑わせているのは主にイハノヒメである。こつした天皇達の姿には、個の人間としての感情表出が乏しい。『古事記』は天皇達に個性を与えないかのようである。荻原千鶴氏は

……『古事記』が天皇即位の事由を具体的に語ろうとしないこと、大后記載を常備しないことは、ともに用意の不在ではなく、周到に用意された不在、意図された沈黙と考えるべきであろう。

……『古事記』は沈黙によって、事由を必要としない「天皇」の絶対性を構築した。天皇は天皇として絶対で

あり、すでに天皇として在るならば、そこに至る事由は問題ではないのである。こうして『古事記』は生母の出自・群臣の意向・王者にふさわしい資質、などの要件を超えることによって「天皇」を絶対化する。そしてまたそのために、ひとりひとりの個としての天皇を捨象した。

と述べ、天武以後の皇位継承をめぐる不安に対する用意として意図された構想と考えている。⁽²⁵⁾氏はさらに「天皇に背を向ける者たちの話が生彩に富むこと」が、こうした「個を捨象」された天皇との対比においてなされていることを示唆している。感情豊かな、人間味あふれる人物造形は、作品として文芸性を高め、読み手に生き活きとした感動を与える。しかし『古事記』の目指す第一の到達点は、天皇の統治する王権そのものの優位性、超越性である。天皇は天皇としての存在であり、そこに歴代天皇の個性が印象づけられてはならなかったのではないか。景行の描かれ方にはこうした理由が見出される。

そしてオホナムチ（オホクニヌシ）も、その説話の分量の多さからは意外なことだが泣くことはない。いつも周囲が泣き、彼の危機を救っている。オホナムチが決して泣かなかったのも、たとえば数種類の資料の切り貼りを基にした机上の創造による偶然の産物などではなく、国譲りで大和朝廷の統治が正当化される以前の「クニヌシ」の姿に、とにかく絶対的な代表者としてのイメージを与えたかったためではなかつたか。天孫降臨を前に委譲された「クニ」は、絶対的な代表権を持つ者によって委譲されねばならなかつた。そこには出来る限り大きな存在として描かれた「クニヌシ」が求められ、そのオホクニヌシに「クニ」を譲らせることで、王権の権威を示し得ていると思われる。⁽²⁶⁾譲る神の姿は大きく描かれながらも、事後は永遠に退場していく「クニヌシ」にリアルなイメージは不要であつた。また、そこに個性がほの見えてしまえば、それがまた別の個性を連想させることにもなる。国譲りが一度で済まなくては

神話として語る意味もない。泣かせないことによって、『古事記』はオホナムチの神話を語り得たといえる。

四

『古事記』は、天皇の個性を出来る限り抑えることで、統一された「天皇」像を作り上げようとした。その方法が、歴代天皇になるべく人間的な情感を吹き込まないと言つ、いわば消極的な描き方であった。天皇を中心とした王権の絶対的な価値を語るために、その中心となる歴代天皇を、その人物造形のありようとして真空に近づけていくという方法を選んだのである。そのために、作品全体としてのまとまりを持たせる上で、周囲の人物造形や歌謡の充実が必要となり、作品としての文芸性が保証されることとなったのである。『古事記』がタケル物語のような文芸性を持ち得た理由の一つは、その構想の下に内包されている仕組みそのものにあつたと思われる。つとに吉田義孝氏が述べているように、天武像が絶対化され、統一的天皇像が後の皇位継承者、とりわけ草壁王後の元明朝に至る継承者にとつて、重要な拠り所となった筈である。人麻呂の日並皇子殯宮挽歌（巻二・一六七）では、降臨する神とみなされる天武の姿が歌われ、高市皇子殯宮挽歌（巻二・一九九）でも、神武以来の歴代には触れずに天武の登場を歌つ。こうした人麻呂の歌い方は、原神話のよつなものから適当な説を持ち出したのではない。記紀ともまた異なる、人麻呂の立場での歌い方として捉えるべきものであり、神野志隆光氏によって人麻呂独自の天皇神格化表現として詳細に分析されるところである。天武朝を新王朝の始祖と見て、その「正当性の確信」を求めたときの表現として、降臨する天武の姿が歌われるのである。⁽²⁸⁾そこには神武以来の歴代の姿が凝縮されている筈であるが、表現としては天武しか歌われてい

ない。近江荒都歌において

玉だすき 畝傍の山の 檀原の 聖の御代ゆ 生れましし 神のことごと つがの木の いや継ぎ継ぎに 天の
下 知らしめししを……(巻一・二九)

と歌われている「いや継ぎ継ぎに」は、神武以降、天智に至る歴代を時間もろとも一纏めにしている。こうした表現方法が獲得されていくのと同時進行の形で、記紀は編纂されている。それぞれの立場で皇統を採り上げ、表現を試みる中で、皇統讃美の歌は金村、赤人を経て家持へと受け継がれていく。家持が「高御座 天の日継と」(巻十八・四〇八九)「千代重ね いや継ぎ継ぎに 知らし来る 天の日継と」(巻十九・四二五四)と歌うのは、天皇を神とする皇統讃美表現に、その受け継がれてきた継承を加えた独自の表現である。こうした歴代を凝縮した表現は、新王朝としての天武朝を意識することで初めて可能となり、人麻呂から家持に至る行幸従駕経験者によって受け継がれていった。その流れと並行し、時には混じり合いながら、神話・説話を編纂していく中で『古事記』の天皇についての描き方が定まっていたのである。王権の絶対性を語る目的のために、方法として歴代天皇の人物造形を消極的にしていくという逆立ちした発想は、壬申の乱を一つの画期とし、新王朝を始祖とすることで思い切った皇統譜の語り出しを達成した人麻呂の手法に触発されるところがあったのではないだろうか。少なくとも、そのような新王朝の意識下に底流した新たな価値観によって、『古事記』の天皇像は完成されたものと思われる。

注

- (1) 大館真晴氏は『日本書紀』のタケル像について、「大碓皇子との対比を通して父景行天皇に対して「孝」なる人物として描かれている。」として、景行の後継者たる資質を捉えだしている。（『日本書紀』にみる日本武尊像　大碓皇子との対比から　『国学院大学栃木短期大学「野州国文学」』69　平成十四年三月）
- (2) 西郷信綱「ヤマトタケルの物語」（『古事記研究』　未来者、昭和四十八年。初出は「文学」昭和四十四年十一月）
- (3) 吉井巖「孤独な皇子ヤマトタケル」（『天皇の系譜と神話』二「塙書房、昭和五十一年。初出は「歴史と人物」昭和四十七年十一月。および「国文学」18・9　昭和四十八年七月）
- (4) 吉井巖『ヤマトタケル』学生社、昭和五十二年。
- (5) 引用は新編日本古典文学全集本の訓読本文によった。なお、後掲の原文による用例の掲出も、同書の校訂本文による。
- (6) 『日本書紀』の引用についても（5）に同じ。
- (7) 菅野雅雄氏はこの景行の態度について『古事記』が小碓命と倭建命とを同一人物とした際に、「物語の筋を通すことを計ったために、「兄」大碓命の不行跡を殺して然るべきものと語らねばならなかった」結果として加筆されたものとしている。（『「景行記」大碓命の物語』『古事記構造の研究』おうふう、平成十二年。初出は、桜井満博士追悼記念論集『古典と民俗学論集』おうふう、平成九年）
- (8) 西条勉「ヤマトタケルの暴力　構造化するテクスト」『日本文学』41・8　平成四年八月）
- (9) 及川智早氏「古事記　中巻ヤマトタケル（小碓）命西征譚試論」（『早稲田大学「国文学研究」』130　平成十二年三月）
- (10) 都倉義孝「倭建命物語論」（『古事記　古代王権の語りの仕組み』有精堂、平成七年。初出は『講座日本の神話6』有精堂、昭和五十一年）
- (11) 松本直樹氏は「オホウスの犯した罪は単なる横恋慕などではなく、宗教的支配権の篡奪であり、謀反にも匹敵する罪であったように思える。」と述べている。（『早稲田大学「国文学研究」』139　平成十五年三月）
- (12) 前掲の菅野雅雄氏は、大雀の場合および大碓に処罰がなされない事、さらに大碓の子孫系譜が記されている事から、大碓も本来は皇位継承候補者であったか、としている（前掲書）。

(13) 田中智樹「倭建命系譜考」(「古事記年報」45 平成十五年一月)

(14) 掲出した用例の他に、「遣」字が用いられていて「ツカハス」と訓む可能性のあるものを次に示す。

ア・乃遣^レ遣^ル於木国之大屋毘古神之御所。 上巻・根の堅州国訪問「母神」

イ・拔所御佩之十掬鋸、切伏其喪屋、以足蹶離遣。 上巻・天若日子の派遣「阿遲志貴高日子根」

ウ・故、乞^レ遣其父大山津見神之時、大歡喜而、 上巻・邇々芸命の結婚「邇々芸」

エ・即其母、取布遲葛而、……令取其弓矢、遣其嬪子之家者、其衣服及弓矢、悉成藤花。 中巻・秋山の神と春山の神「母」

オ・天皇、恋八田若郎女、賜^レ遣御歌。 下巻・仁徳・八田の一本菅「天皇」

カ・爾、多祿給其老女以、返遣也。 下巻・雄略・引田部赤猪子「天皇」

アの「遣遣」、イの「蹶離遣」、ウの「乞遣」、オの「賜遣」、カの「返遣」については、「ツカハス」と訓む可能性を完全に否定することはできないものの、補助動詞的な用法として「ヤル」と訓むべきものと思われる(ウの乞遣については新全集本以外の諸注釈書はツカハスと訓む)。また、エの場合はツカハス主体が母であり、ヲトメの家に息子を行かせる意味では、「ツカハス」では大げさであろう(記伝、新講、国民全書、全書、全講、全注、角文、新全集がヤルと訓む)。

(15) 『日本書紀』では、

ア・時長髓彦乃遣行人言於天皇曰、……(神武)

イ・七年夏六月、百濟遣姐弥文貴將軍・洲利即爾將軍、副穗積臣押山、……貢五經博士段楊爾。(継体)

ウ・冬十月癸卯朔、大臣遣阿曇連……阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、「葛城皇者元臣之本居也。」(推古)

エ・是夜半、鈴鹿閑司遣使奏言、……(天武)

などと天皇以外の主体を以て使われる例があり、また、

オ・於是日本武尊遣葛城人宮戸彦、喚弟彦公。(景行)

と、ヤマトタケルが主体の例もある。

ちなみに「ツカハス」の有する意味、また首数の面からも歌謡としては用いられにくく、「万葉集」では、誰かをどこかへ行かせる場合には、巻二の一〇五番歌の「我が背子を大和へ遣るとさ夜ふけて曉露に我が立ち濡れし」のように「ヤル」

が用いられ、天皇の命令によって出かける場合について、わずかに次の例がある。

ア・……唐の遠き境に遣はされ罷りいませ……（巻五・八九四）

イ・……山のそぎ野のそき見よと伴の部を班ち遣はし……（巻六・九七一）

ウ・大君の遣はさなく賢しらに行きし荒雄ら沖に袖振る（巻十六・三八六〇）

エ・……住吉の三津に船乗り直渡り日の入る国に遣はさる我が背の君を……（巻十九・四二四五）

(16) 谷口雅博『古事記』における「倭建命」と「倭」（『古代文学』39 平成十一年三月）

(17) 守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』（和泉書院 昭和六十三年 初出は『日本書紀研究第十三冊』塙書房 昭和六十年）

(18) 荻原千鶴『古事記』の雄略天皇像（『上代文学』78 平成九年四月）

(19) (10) に同じ。

(20) 新全集本の頁数と行数は以下の通り。42・2、54・3、54・4、54・4、54・4、54・7、54・8、56・9、56・10、68・

8、68・10、68・12、76・1、76・2、76・9、78・12、80・3、82・7、102・15、104・1、104・5、104・7、126・3、126・

4、126・6、198・7、200・3、222・13、234・16、272・16、280・11、320・1、342・11、356・12。

(21) 山田永『泣くこと』（『上代文学』64 平成二年四月）

(22) 「喜」「歎」「悦」「欣」「嘉」「慕」およびこれらの熟字による。新全集本の巻数・頁数・行数と天皇名を以下に示す。212・

3、212・10、214・6、232・3、神武。316・6、326・1、垂仁。488・15、494・13、応神。68・7、仁徳。88・10、履中。108・

8、114・7、允恭。160・5、170・5、雄略。234・12、顕宗。416・12、欽明。554・2、推古。210・1、324・11、天武。

(23) 「咲」「晒」「嗤」によって表記されるもの。雄略の例は、新全集本 166・12、武烈の例は、同 280・1。

(24) 柳田國男『鳴瀬の文学』（『不幸なる芸術』所収。『定本柳田國男集第七巻』筑摩書房によった。初出は『芸術』3 昭和二

十二年）

(25) 荻原千鶴『古事記の構想と天皇像』（『古事記研究大系3』高科書店、平成六年）

(26) 拙稿「蘇生する大穴牟遲神」（『古事記年報』43 平成十三年一月）

(27) 吉田義孝『古事記成書化の基礎』（『柿本人麻呂とその時代』桜楓社、昭和六十一年。初出は北山茂夫編著『日本古代の政

治と文学』青木書店、昭和三十一年）

（28）神野志隆光「天皇神格化表現をめぐって」（柿本人麻呂研究』塙書房、平成四年。初出は『稲岡耕二先生還暦記念 日本

上代文学論集』塙書房、平成二年）

（29）小野寛氏「家持の皇統讃美の表現」（『大伴家持研究』笠間書院、昭和五十五年。初出は『論集上代文学第二冊』、笠間書院、昭和四十六年）

なお、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の引用は、いずれも新編日本古典文学全集本（小学館）によった。

（本学非常勤講師）